

「死後のセカンドチャンス」はあるのか？

Copyright©2013 Mormon Outreach Ministries, Sydney

末日聖徒イエス・キリスト教会（通称 モルモン教会）は「死後のセカンドチャンス論」（死後キリストの福音を聞き悔い改める機会が与えられること）を教えており¹、その証拠としてペテロの第一の手紙 3:18-20 と 4:6 を挙げています。末日聖徒に「イエス・キリストの福音を一度も聞いたことのないまま死んだ人々はどのような裁きを受けますか」としばしば聞かれます。この質問は多くのノンクリスチャンとクリスチャンからも時々提起されることがあります。「福音を一度も聞かずに死んだ人を神が地獄に送ることは公正でしょうか」「幼くして死んだ子どもたちは永遠に天の御父と過ごす機会を逃すのでしょうか」とも聞きます。ここでは、次の四つ問題を取り上げて進めていきたいと思えます。(1)「福音」の定義。(2) 死ぬとどうなるのか？(3) 聖書のペテロ第一の手紙 3:18-20 と 4:6 の教えについて。(4) よくある異議への応答。聖書は日本語圏のモルモン教会員が好む日本聖書協会の『口語訳聖書』を使用しています。

1. 「福音」とは？

モルモン教会は「福音」は「イエス・キリストの贖罪によって可能になった神の救いの計画」であって、その中に「人が神のもとに戻るのに必要な、永遠の真理や、律法、聖約、儀式が含まれる」と教えています（『わたしの福音を宣べ伝えなさい—伝道活動のガイド』2004年、70頁、『聖書ガイド』—「合本：『モルモン書』『教義と聖約』『高価な真珠』内、1995年、220頁）。（MOMサイト「福音」参照）

これとは対照的に、聖書は、福音とはわれわれの罪の許しのためのイエスの死と体の復活のメッセージで（コリント人第一 15:1-4）「神のめぐみの福音」（使徒行伝 20:24）と教えています。独りよがりな働きではなくて、恵みのみによって、私たちが罪を告白するならば、神はすべての私たちの罪を赦して、主のみ前に住むのにふさわしい者としてくださるのです（エペソ 2:8-10、テトス 3:5-6、ヨハネの手紙第一 1:7-9）。使徒パウロは自分たちが「宣べ伝えた福音に反する」ことを宣べ伝える福音は「違った福音」でその「福音」を宣べ伝えるものは「のろわるべきである」と警告しています。（ガラテヤ人への手紙 1:6-8）

2. 私たちは死ぬとどうなるのでしょうか？

モルモン教会は死後私たちの霊は霊界に行くと言っていますが、霊界には「パラダイス」と「霊の獄（ひとや）」と二つの区分すなわち状態があることになっています（『福音の原則』2009年、第41章—モルモン教会の公式の学習テキスト）。モルモン教理の「パラダイス」とは、一時的な場所で、「この世を去った義人の霊が肉体の復活を待つ場所」です（<http://ja.mormonwiki.com/%E6%AD%BB%E8%80%85%E3%81%AE%E6%95%91%E3%81%84>）。①「霊の獄」はまだモルモン教の「福音」を受け取っていない霊と②地上や霊の獄でモルモン教の福音を宣べ伝えられながらも拒んだ人の霊のためだそうです（『福音の原則』第41章）。霊界にいる末日聖徒の霊は「霊の獄」にいる霊にモルモン教の「福音」を宣べ伝えて宣教の奉仕に従事しているとのことです（『福音の原則』243-244頁、『教義と聖約』138:30—モルモン教会正典の一部）。霊がモルモン教の「福音」を受け入れ、また地上にいる末日聖徒が身代わりにパプテズマと神権聖任、エンダウメント、結び固めを含む「すべてのの儀式」を受け入れると、霊は「霊の獄」を去って「パラダイス」へ入ると教えられています（『教義と聖約—生徒用資料』1986年 470-471頁—モルモン教会公式学習テキスト、モルモン教会版『聖句ガイド』253頁）。

モルモン教会は最終的な運命には四つの階級があることを教えています。最後の裁きで、三つの栄光の階級に区分される天国—「日の栄えの王国」（栄光の最高の階級）、「月の栄えの王国」（第二の階級）、「星の栄えの王国」（最も低い階級）—のいずれかを受け継ぐということです。復活後、最終的にはほとんどの人は、「霊の獄」を去り「星の栄えの王国」に行きますが²、「滅びの子」³のみが外の暗闇に行くことになっています。（『福音の原則』272-273頁）（MOMサイトの「天国」を参照）（『福音の原則』243頁）

これとは対照的に、聖書では最終的な運命は「永遠の天国」か「永遠の地獄」の二つしかないこと教えています（ダニエル 12:2、マタイ 25:31-46、テサロニケ第二 1:5-9）。聖書は新約聖書で啓示されたキリストにあって死んだ者の魂は、直ちに主の御前に行き主との交わりを享受すると教えています（ルカ 23:43、ピリピ人への手紙 1:3、コリント第二 5:8）⁴。新約聖書にあるキリストなしに死んだ者の魂は直ちに永遠の刑罰の状態に行きます（ルカ 16:24-26）。こういった人の体は最終的な裁きの日まで復活することはありません（ヨハネ 5:28-29、使徒行伝 24:15）⁵。

3. ペテロ第一の手紙 3:18-20 と 4:6

モルモン教会は、イエスは十字架の上の死と復活の間に、霊界のモルモン教会の義人のもとに行かれ、モルモン教理の福音をすべての人の霊に宣べ伝えさせるために使者を任命されたと教えています。（『教義と聖約』138:27-30。—『教義と聖約』はモルモン教正典の一部）その証拠としてペテロ第一の手紙 3:18-20 と 4:6 を引用しています。

これとは対照的に、聖書は、終始一貫して救いの「セカンド・チャンス」はないと説いています（ヘブル人への手紙 9:27、ヨハネの福音書 8:24、ルカの福音書 16:19-31）。ヘブル人への手紙 9章 27節は「一度だけ死ぬことと、死んだ後さばきを受けることが、人間に定まっている」と述べています。「だからわたしは、あなたがたは自分の罪のうちに死ぬであろうと、言ったのである。もしわたしがそういう者であることをあなたがたが信じなければ、罪のうちに死ぬことになるからである」（ヨハネの福音書 8:24）。聖書はペテロ第一の手紙 3:18-20 とペテロ第一の手紙 4:6 についてどのように教えているのでしょうか？

ア) ペテロ第一の手紙 3:18-20

^{3:18} キリストも、あなたがたを神に近づけようとして、自らは義なるかたであるのに、不義なる人々のために、ひとたび罪のゆえに死なれた。ただし、肉においては殺されたが、霊においては生かされたのである。^{3:19} こうして、彼は獄に捕われている霊どものところまで下って行き、宣べ伝えることをされた。^{3:20} これらの霊というのは、むかしノアの箱舟が造られていた間、神が寛容をもって待っておられたのに従わなかった者どものことである。その箱舟に乗り込み、水を経て救われたのは、わずかに八名だけであった。

「獄に捕われている霊どものところに下って行き、宣べ伝えることをされた」とはどういう意味でしょうか？ペテロ第一 3:18-20 について、クリスチャンの間で論争があります。主な四つの解釈は下記のとおりです⁶。

① 大洪水以前に受肉前のキリストが、ノアを通して（ペテロ第二 2:5）同時代の人たち（創世記 6-8）に悔い改めのメッセージを伝えました。悔い改めなかった人たちが現在獄に捕われています。

② キリストは十字架上の死と復活の間、「キリストの黄泉降下」の時、ノアの時代の悔い改めなかった人たちに救いの勝利を宣言された。

③ キリストは十字架上の死と復活の間に、黄泉に閉じ込められている、一しばしば創世記 6:2, 4 の「神の子たち」と同定されている一墮落した御使いたち、に救いの勝利を宣言しました。

④ 復活したキリストが、昇天された時、墮落した御使いたちに救いの勝利を宣言された。

どの解釈が正しかろうとも、（聖書に忠実な）福音主義の学者は、これらの聖句は、死者が福音を聞き、悔い改める機会があることを教えていないことで全員一致しています。さらに、ペテロは一般的に霊たちに宣べ伝えたとはいっていません、しかし限られたグループの人たち（「これらの霊というのは、むかしノアの箱舟が造られていた間、神が寛容をもって待っておられたのに従わなかった者ども」）です⁷。

イ) ペテロ第一の手紙 4:5-6

^{4:5} 彼らは、やがて生ける者と死ねる者とをさばくかたに、申し開きをしなくてはならない。^{4:6} 死人にさえ福音が宣べ伝えられたのは、彼らは肉においては人間としてさばきを受けるが、霊においては神に従って生きるようになるためである。

「死人にさえ福音が宣べ伝えられた」とはどういう意味でしょうか？ ペテロ第一の手紙 4:5-6 はもうひとつの難しい聖句です。二つの解釈を挙げます。

① 死人とは霊的に死んでいた者（エペソの手紙 2:1）とします。しかし、ペテロは「生ける者と死ねる者」と 5 節で述べており、5 節の「死ねる者」とは肉体的に死んだ人を意味しています。6 節でペテロが突然それを霊的に死んでいた者に言及を移行するとは考えられません⁸。

② 死人とは現在死んでいる人で、生存中に福音を伝えられたとします⁹。

ペテロ第一の手紙の主な目的は信仰のために迫害されているクリスチャンを励ますことでした（1:6, 2:19-23, 3:13-14, 4:14）。4 章 1-5 節でペテロは、最後の審判の日には、神はキリストのために苦難を受けている信者の真正を立証し、信者を迫害する者に申し開きを要求なさるといって、現在迫害されている信者が、将来、名誉挽回を希望できると励ましています。死後再び、福音を聞く機会が与えられるとペテロが伝えようとしていたとすると、苦しみの中にある信者にとって慰めにはならなかつと思われます¹⁰。

4. よくある異議への応答

ア) 福音を聞いたことがない人を神が地獄に送ることは公平でしょうか？

この質問にはいくつかのポイントが含まれています¹¹。

① イエス・キリストの福音を聞く機会がなく死んだ人も罪人です（詩篇 51:1、エペソ 2:3、ローマ人への手紙 1:20、3:22-23）

② キリストの贖いの働き以外には救いはありません（使徒行伝 4:12、ヨハネ 14:6、テモテ第一 2:5、ヘブル 10:12,14）。

③ 神の救いに十分な特別啓示を与えられたことがない人を有罪と判決するのは公正です（ローマ人への手紙 1:20、使徒行伝 14:17）聖書は、誰もが完全に機会がないわけではなく、すべては神を知っていながら真理をはばんだと教えています（ローマ人への手紙 1:18-25）。神がご自身をすべての人に被造物と心に刻まれる律法（良心）においてははっきりと明らかにされましたが、人はこの光を拒否しました¹²。人間の最も深刻な問題は、神についての知識の欠如ではなく、神を神としてあがめないことです。これを聖書は「罪」と呼んでいます。「わたしたちははたがっている光をはばんでいるので、神はさらに光をくださる義務はありません。」（ノーマン・ガイスラー¹³）（ローマ人への手紙 1:18、ヨハネ 3:19）イエスは「そのさばきというのは、光がこの世にきたのに、人々はそのおこないが悪いために、光よりもやみの方を愛したことである」と述べています（ヨハネ 3:19）。

誰でも本当に神を自然啓示を通して求めている場合は、神は救いのために必要な、特別啓示を提供してください。 「神に来る者は、神のいますことと、ご自身を求め者に報いて下さることとを、必ず信じるはずだからである」

（ヘブル 11:6、使徒行伝 17:27 参照）使徒行伝 10 章ではイスラエルの真の唯一の神を求めた神を畏れる異邦人のコルネリオの物語を述べています。神はペテロをコルネリオのもとに福音を伝える（特別啓示）ために送りました。ペテロは「神は人をかたよりみないかたで、神を敬い義を行う者はどの国民でも受けいれて下さることが、ほんとうによくわかってきました」と宣言しています（使徒行伝 10:34-35）（使徒行伝 8:26-40 のエチオピア宦官を参照）¹⁴

④ 天にはあらゆる国から救われた人たちがいます。「あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから、数えきれないほどの大ぜいの群衆が、……御座と小羊との前に立ち」とあります（黙示録 7:9）。

イ) 幼くして死亡した子供は救われるのでしょうか？

幼くして死んだ者や、知的障害のある人が天の御父と天国で過ごすことができるのかどうかはわかりません。しかし神のさばきが正しいことを確信しています。旧約、新約聖書を通してご自分を啓示された神は、恵み深く、正しい方でご自分の性格と相反することは、全くされない方であるからです。

聖書は伝道の緊急性を述べています。死は私達の運命を定めるからです（箴言 29:1、ヨハネの福音書 8:24、ヘブル人への手紙 3:7-13、9:27、ペテロ第二の手紙 3:9）パウロは「見よ、今は恵みの時、見よ、今は救の日である」と述べています（コリン

ト第二 6:2)。「さて前に話したように、あなたがたにはすでに非常に多くの証拠があるので、最後まで悔い改めの日を引き伸ばすことのないように切に勧める。」

『モルモン書』内のアルマ書 34:32-35 は救いのセカンドチャンスを否定しています。「見よ。現世は人が神にお会いする用意をする時期である。まことに、現世の生涯は、人が各自の務めを果たす時期である。さて前に話したように、あなたがたにはすでに非常に多くの証拠があるので、最後まで悔い改めの日を引き伸ばすことのないように切に勧める。永遠に備えるためにわたしたちに与えられている現世の生涯を終えると、見よ、もしわたしたちが現世にいるあいだに時間を有益に用いなければ、後から暗闇の夜がやって来る。そしてそこでは何の働きもできない」とあります(アルマ書 34:32-33) (モーサヤ書 2:36-39 参照)

結論： 多くの人は神は愛であることを認めています、神が正しい方(申命記 32:4, ダニエル 4:37, ヨハネ第一 1:9, 黙示録 19:2)であることは忘れているようです。神は愛ですがそれだけではなく正しい方です。神の正義はすべての罪人を罪に定めることを必要としますが、同時に神は愛ですので、信じるすべての人のために恵みによって救いの道を与えるなければなりません(ローマ 10:3, エペソ 2:8-10 参照)。神学者のウエイン・グルデムは、次のように適切に述べています。「死後キリストを受け入れる機会があるという考えは、『だれでもキリストを受け入れるチャンスを与えるに値する、また、意図してキリストを拒絶した者のみ永遠の刑罰を受ける』という推定にもとづいています。しかし聖書はこの考えを支持しません。我々は一人残らず、生まれつき、また意図的に罪人であって、神の恵みや、キリストの福音を聞く機会を受けるのにふさわしくありません。永遠の命や、福音を聞く機会は、われわれが受けるに値しない神からの無償の贈物なのです。」¹⁵

脚注

1. 『教義と聖約』 76:73, 88:99、137:7-10、138:30—『教義と聖約』はモルモン教正典の一部。
2. モルモン教会は、生存中にモルモン教会の福音を知らずに死んだ人は皆、霊の世界で第二のチャンスが与えられるので、天で最高の王国の「日の栄え」を受け継ぐ機会があると、教えています。『教義と聖約』137章7節は、「この福音を知らずに死んだ者で、もしとどまることが許されていたらそれを受け入れたであろう者も皆、神の日の栄えの王国を受け継ぐ者となる」と述べています。しかし、地上でモルモン教の福音を拒否したが霊の世界で受け入れた人は、「月の栄え」を受け継ぐと教えられています(『教義と聖約』76章71-74節) 3
3. モルモン教会版『聖句ガイド』は、「滅びの子」とは「サタンに従う者たち。サタンとともに永遠の苦しみを味わう。滅びの子と呼ばれるのは、次の者たちである。(1)前世でサタンに従って反逆したために、天から追放された者。(2)肉体を受けてこの世に生まれることを許されながら、サタンに仕え、神にことごとく背いた者」と述べています。(242頁)
4. クリスマンの中には、旧約聖書の聖徒は黄泉の国に入ったが、イエスの昇天後、キリストにある信者は直接神のみ前に入ったと信じる人たちがいます。しかし、旧約聖書は旧約聖書の聖徒は死後、直接神のみ前に行ったと教えています(創世記 5:24、列王紀下 2:11、箴言 14:32、ルカ 16:25)。マタイ 22:32 は アブラハム、イサク、ヤコブは生きており、神と途切れることのない交わりを持っている事を暗示しています [Wayne Grudem, *Systematic Theology* Leicester, IVP, 1994) p.821-822]
5. Wayne Grudem, *Systematic Theology* (Leicester, IVP, 1994), p.824
6. *The Reformation Study Bible-English Standard version* (Florida, USA, Ligonier Ministries, 2005) p.1815
7. Grudem, p.590
8. Peter Davids, *The First Epistle of Peter*, NICNT (Grand Rapids, Eerdmans, 1990) p.153
9. 6節の時制は口語訳ではわかりにくいですが、モルモン教会公認の英語の『欽定訳聖書』では、明確です。
⁶*For this cause was the gospel preached (in the past 過去) also to them that are dead (presently, 現在), that they might be judged according to men in the flesh, but live according to God in the spirit.*
『新共同訳聖書』はペテロ第一 4:6 のイの解釈を支持しています。
⁶死んだ者にも福音が告げ知らされたのは、彼らが、人間の見方からすれば、肉において裁かれて死んだようでも、神との関係で、霊において生きるようになるためなのです。
10. ウィリアム・ウッド『セカンドチャンスは本当にあるのか?』(いのちのことば社、2007年)43頁
11. Norman Geisler, "Heathen, Salvation of" in the "Baker Encyclopedia of Christian Apologetics" (Grand Rapids, Baker House), 1999) p.305-306
12. Ibid
13. Ibid
14. クリスマンのラジオ、テレビ番組、録音テープ、トラクトを通して福音に触れる人もいるでしょう。(聖書を手に入れるのが困難な状況でも)、神がご自分を夢や幻で現わされたり、人を遣わされることもあるでしょう。神がご自分を人間に啓示される能力を過小評価してはなりません。
15. Wayne Grudem, *Bible Doctrine* (Leicester, IVP, 1999) p. 355